

この人たちは何故に政治家ら、政治の世界に飛び込めなくなったのか。素朴な疑問をば、混沌と後悔の中に身を投有権者に抱かせる国会議員は後を絶たない。

「公務を取引やお金儲けに近づけてはいけない」

これは政治論に取り組んだ古代の哲学者、プルタルコス「政治家になるための教訓集」の中にある言葉だ（京都大学学術出版会『モラリア』9）。現代でも通用する戒めであろう。

前4世紀のアテネの政治家

歴史の交差点

富士通FSC特別顧問 山内昌之



には、演説用の壇を「黄金の刈り入れ」と呼ぶ者たちもいた。日本風にいえば、金のなる木というところか。競走馬の買い入れのために業者に金を無心した大胆不敵な日本の政治家もいる。古代ギリシャの煽動政治家（デマゴグ）も顔負けではないか。また、衝動的な激情（パトス）の発作に襲われて公務に近づくのにも良くないとされた。

う。何もすることがない空虚に根拠をおくなど注意している。家が政治家の世襲家系だから秘書や議員になる、何の用もないのに人が集まるから会合に出て顔を売り暇をつぶすといった人びとは、プルタルコス流では本来政治家になつてはならないのだ。

政治家にとって厄介ながら大事なものは、その土地なりの個性や癖を持つ市民たちの掌握である。アテネの市民は怒りっぽいがすくほろりとし

なぜ政治家になったのか

た。彼らが偉いのは、政治においても無名で卑賤の市民に力を貸すということだ。この点では、家門を重視する現代日本の保守政治よりもはるかに「民主的」なのである。アテネ人は愉快で面白い演説しか喜ばない。自分たちを褒められると喜ぶが、からかわれなくても一向に気にしない。

これがカルタゴ人となる。アテネ人と逆になる。ギリシャ人であるプルタルコスの言い分では、彼らは必ずすすして陰険であり、上司には従順なくせに従属者には苛酷なのだ。一度決まったことに固執しながら、恐怖に陥れば極度に卑屈になり、激怒すれば残酷になる。こうした民衆を統治する政治家も大変だったろう。

プルタルコスは、政治家に必要なのは民衆の性格を真似することなく理解することだとした。その性格を自家薬籠中のものとして使いこなすし、習熟することが政治家というのだ。冗談が通じるアテネ型の市民と、冗談がまったく効かないカルタゴ型の民衆、政治家ならどちらと付き合いたいだろうか。

（やまうち まつゆき）